

# ある外国ルーツの若者が 大学進学・卒業・就職に至った過程

—複線径路等至性モデリング (TEM) による分析から—

山森理恵 (明治大学)

yamamori\_m@meiji.ac.jp

## 【要約】

本研究は外国ルーツの若者が高校・大学の進学を経て就職に至る過程の事例を集め、影響を及ぼした要因を探り、進路を考える外国ルーツの子どもたちや、先生・地域支援者などに示すことを目的とする研究の一環である。本稿では一人のブラジルルーツの若者にインタビューを行い、複線径路等至性モデリング (TEM) により分析を行う。その結果は、親の影響や支え、工場で働きたくない気持ち、学校の先生の支え、ロールモデルの存在、経験や仲間を得る機会、強味を持つことが鍵となることを示唆するものであった。

## 1. はじめに

日本に在住する外国人数は 2013 年末には約 207 万人であったが、2024 年 6 月末には約 359 万人と 10 年余りで大きく増加している (出入国在留管理庁ホームページ)。外国人労働者数も 2013 年に約 72 万人であったのが、2024 年 10 月末には約 230 万人 (厚生労働省ホームページ) と著しい伸びを見せている。それに伴い、外国籍の子ども数も増加している。小学校相当・中学校相当の合計人数が 2019 年は約 12 万人であったのが、2023 年には約 15 万人にまで増えている (文部科学省 2024a)。在留外国人数に帰化人口と国際児 (外国籍の親を持つ子) 人口を加えた「外国に由来する人口」が 2065 年には 1,076 万人 (総人口の 12.2%に相当) に、年齢階層別にみると 20-44 歳については人口の 17.9%に達するという見通しもあり (国土交通省ホームページ)、日本における外国人数や子どもの数は今後も増加していくと見られる。

このような現状を踏まえると、外国にルーツを持つ子どもたちに対する教育環境の整備が喫緊の課題と言えよう。しかし、実態はどうであろうか。高校への進学については、外国ルーツの生徒の高校への進学率は 89.9%と、全中学生等の 99.2%と比べると隔たりはあるものの (文部科学省 2023)、「外国人生徒の高校進学の促進」の検討、公立高校入試にかかわる「枠」「措置」の自治体間格差の是正、受け入れ体制の整備など、進学を促進するための動きが広がっていると小島 (2019) は指摘している。今後、高校進学については格差が少しずつ是正されていくことが期待される。

一方、高等学校等卒業後の進学的环境について見ると、大学や専修学校などの教育機関等 (短期大学、専門学校、各種学校を含む) への 2021 年の進学率は、全高校生等が 73.4%であったが、日本語指導が必要な高校生等の場合、51.8%と大きな開きがある。2023 年には全高校生等は 75.0%とやや進学率が上昇しているが、日本語指導が必要な高校生等は 46.6%と逆に低下し、さらに差が大きくなっている (文部科学省 2024b)。外国ルーツの生徒たちの進学のための環境が不十分であることを物語っている。

日本学術会議は 2020 年に「提言 外国人の子どもの教育を受ける権利と修学の保障——公立高校の「入

口」から「出口」まで」を発表し、高校における多文化共生コーディネーターの配置や、より多くの大学における外国人生徒対象の推薦入試、特別枠の実施、「国内高等学校等出身外国人学生」向けの奨学金の特別枠設置などさまざまな提言を行っている（日本学術会議 2020）。しかし、現在の日本の状況は外国ルーツの生徒の進路選択が十分に保障されているとは言い難い。大学の中には、外国ルーツの生徒の進学率の低さを憂慮し、外国ルーツの生徒の存在を認知し、肯定的に捉え、特別枠を設置するなど受け入れる動きも見られるが、外国ルーツの生徒の存在に対する認知、制度や体制は十分とは言えず、全国の大学の海外からの留学生の入学受け入れ体制<sup>1</sup>と比較すると、外国ルーツの生徒の置かれた状況は大きな違いがあると言わざるを得ない（山森・田口 2024）。

どのようなルーツの子どもであろうとも、自由に進路を選択できる社会であるべきであるが、大学進学を経て幸せな就職を果たし、幸せに働くことが容易に実現できるよう、外国ルーツの子どもたちが大学進学を含め自由に進路を選択できる環境を整える必要がある。

## 2. 本研究の目的

外国ルーツの子どもにとって、必ずしも大学進学だけが望ましいというわけではないが、本人が望む場合に選択の機会が与えられることが必要であり、そのための環境を整えていく必要がある。その方法の一つとして、外国ルーツの若者がどのように高校・大学の進学を経て、就職に至ったか、事例を集め、影響を及ぼした要因を探り、その結果をこれから進路を考える外国ルーツの子どもたちや、高校教員・大学教員・地域支援者など子どもたちの周囲で支援する立場にある人々に示すということが考えられる。

本研究はその一環として、大学進学を経て正規雇用に至った、ある外国ルーツの若者に対しインタビュー調査を行い、それを複線径路等至性モデリング（TEM）によって分析し、その過程に影響を及ぼした経路・分岐点を明らかにすることを目的とする。本研究の対象はブラジルルーツの若者 1 名であるが、今後同様の調査を重ねていくことで、異なる事例を蓄積し、その要因をより明らかにできると考えられる。そのようにして、今後進路を考えていく外国ルーツの子どもたちに進路選択の際に、また、その周囲の人々が支援を行う際に、役立ててもらおうことを目指す。

## 3. 本研究の分析方法と調査方法

### 3. 1 分析方法

本研究では、調査協力者に対しインタビューを実施し、録音を文字化し、複線径路等至性モデリング（以下、TEM）の概念に沿って整理し、図を作成した。TEMとは、「人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデル（荒川他 2012：97）」とされる。決して戻ることのない持続的な時間（非可逆的時間、irreversible time）の流れを横軸あるいは縦軸に置き、実現したことと実現の可能性があったが実現していないことから成る経路の幅を縦軸または横軸に置いた 2 次元で、人間の発達や人生の経路の多様性・複線性、可能性・潜在性をとらえ描く方法である（小澤 2024：47、サトウ・安田（監）2023：91-92）。一人一人の経験をライフストーリーとして描くのに有効であるため、この枠組みを用いることとした。

---

<sup>1</sup> 独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）のホームページ「STUDY in JAPAN 政府公認の日本留学情報」において、「学校検索」のページで紹介されている外国人留学生を受け入れている大学・大学院・短期大学の情報は 459 件、「奨学金・授業料減免制度」のページで紹介されている外国人留学生向けに学校が実施する奨学金・授業料減免制度の情報は 825 件にも上る（2025 年 2 月 26 日現在）。

### 3. 2 研究対象と調査の実施

本研究の研究対象は、ブラジルルーツの若者 1 名である。研究の目的が大学進学を経て正規雇用に至る過程に影響する要因を探ることであったため、大学進学を経て正規雇用に至った若者に対し、調査への協力を依頼した。ブラジルルーツの若者に依頼した理由は、「日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の言語別在籍状況」の 2008 年以降の過去 8 回の調査においてポルトガル語を母語とする児童生徒数が最多であるためである（文部科学省 2024b : 17）。

協力者は、日系ブラジル人女性 A で、小学校 4 年生のときに来日し、当初は 1、2 年で帰国の予定でブラジル人学校に入ったものの、小学校 5 年生の終わりにずっと日本にすることが決まって日本の小学校に転入した。その後、そのまま近くの公立中学校に進学し、公立高校を経て県内の大学に進学した。大学卒業後は旅行関連の会社に就職したが、バックパックの旅行がしたいと考えて会社を退職し、新たに志望したマーケティングの会社で再就職、その後その会社も退職し、1 回目のインタビューを実施した時点では就職活動中、2 回目のインタビューの時点では翌月から希望の職種に再就職が決まったところで、3 回目のインタビュー実施の時点では、再就職先で順調に仕事を開始して軌道に乗ってきた頃であった。

インタビューは計 3 回実施した（2024 年 6 月、8 月、11 月）。1 回目は対面で実施、2 回目・3 回目はオンラインで実施した<sup>2</sup>。

表 1 調査協力者 A について

|         |   |
|---------|---|
| 出身      | ブラジル（日系 3 世）                                      |
| 来日年齢    | 10 歳（小学校 4 年生）                                    |
| 来日後の教育歴 | ブラジル人学校、公立小学校、公立中学校、公立高校（一般入試）、公立大学（推薦入試）         |
| 職業歴     | A 社（旅行業）、B 社（マーケティング・エージェンシー）、C 社（メーカー、マーケティング担当） |

### 3. 3 本研究における等至点（EFP）

TEM は、「個々人が固有な経路をたどっていても、時間経過のなかで、等しく（Equi）到達する（Final）ポイントがある」という考え方に基づいている。それが等至点（EFP）である。等至点（EFP）とは「研究者が関心をもった現象」であるとされる（サトウ・安田（監）2023 : 6）。本研究では、インタビュー実施前の段階では大学に進学・卒業し、正規雇用に至ることを等至点としていた。しかし、調査協力者 A は 1 回目のインタビューの時点で会社を退職後まだ再就職が決まらず、いわば定職を持たない状態であった。にもかかわらず、生き生きとこれまでの過程と現在の状況について語る様子から、自ら仕事や人生を切り拓いていく自信が感じられた。そのことから、若者が到達を目指すべきは正規雇用ではなく、どういった雇用状況、雇用形態であれ、自ら仕事や人生を切り拓いていけるようになるということではないかという考えに至った。そのため、本研究では「自ら仕事や人生を切り拓いていけるようになること」を等至点（EFP）とする。

また、TEM では、EFP と対極の意味を持つ両極化した等至点（以下、P-EFP）を設定する。「両極化した等至点（P-EFP）を設定することで、そこに至る経験にも目配りしながら分析を行いやすくなり、みえにくく

<sup>2</sup> 本研究は、明治大学の「人を対象とした研究等に関する研究倫理委員会」の承認を得て実施した（申請番号 2409）。

なっている経路が捉えやすくなるという効用がある（サトウ・安田（監）2023：6）」ためである。本研究では、「展望を持たずに働く」ことをP-EFPとした。さらに、行動が多様に別れていく分岐点（BFP）、制度的・慣習的・結果的にほとんどの人が経験する必須通過点（OPP）、当事者にとってEFP後の目標や展望のようなものを焦点化するポイントであるセカンド等至点（2nd EFP）、その対極の意味を持つ、両極化したセカンド等至点（P-2nd EFP）を設定し、TEM図を作成した。本研究におけるそれぞれの概念の設定は表2の通りである。

表2 TEMの諸概念と本研究の事例における諸概念の設定

| TEMの諸概念                 | 本研究の事例における諸概念の設定  |
|-------------------------|---|
| 等至点（EFP）                | 自ら仕事や人生を切り拓いていく   |
| 両極化した等至点（P-EFP）         | 展望を持たずに働く   |
| 分岐点（BFP）                | ①来日<br>②このまま日本で暮らし続けることになる<br>③英語の授業が始まる<br>④バレエ部をやめる そのときによさこいチームに誘われる<br>⑤短期留学に応募する<br>⑥色々嫌になってブラジルに帰りたくなる<br>⑦英語推薦で大学進学を目指す<br>⑧履修登録に失敗する<br>⑨退職して、バックパック旅行に行く |
| 必須通過点（OPP）              | ①公立中学校入学<br>②公立高校入学（一般入試）<br>③県内の公立大学入学<br>④大手旅行会社に就職   |
| セカンド等至点（2nd EFP）        | 起業か何かの形で、弟と一緒に仕事をする   |
| 両極化したセカンド等至点（P-2nd EFP） | 弟と一緒に仕事をしない   |

#### 4. 結果と分析

協力者Aが自ら仕事や人生を切り拓いていけるようになる過程をTEM図にした（図1・2・3）。それぞれの時期区分の様子を以下に記す。「」はAの語りの引用（原文ママ）、（）は筆者の補足である。

##### 4. 1 第1期：帰国を想定する

協力者Aは、10歳で来日したが、「もともとは帰る予定で来たので」ブラジル人学校に転入した。そのときの様子について、「ブラジル学校に通ってたときは結構優秀なほう、真面目なほうだった」と語っている。

##### 4. 2 第2期：いじめを恐れる

小学校5年生の終わりごろ、「お母さんがいるっていうことを決めてから日本の学校に入った」。しかし、当時は日本語が全くわからず、「ゼロの状態で小学校行き始めた」ということであつた。そのため当初、クラスでの授業を抜けて別室で行われる日本語教室に参加していたが、「もともと通ってたブラジル人学校で、日本の学校から来た子たちがいて、やっぱりいじめの話とかいろいろな話を聞いて、取りあえずみんなと一緒に行動しなきゃっていうのがすごく頭に入って」いて、「周りとは違う行動するのがちょっと恥ずかしいというか、そういうのがあって」結果として、6年生の2学期からは日本語教室に行くことをやめている。

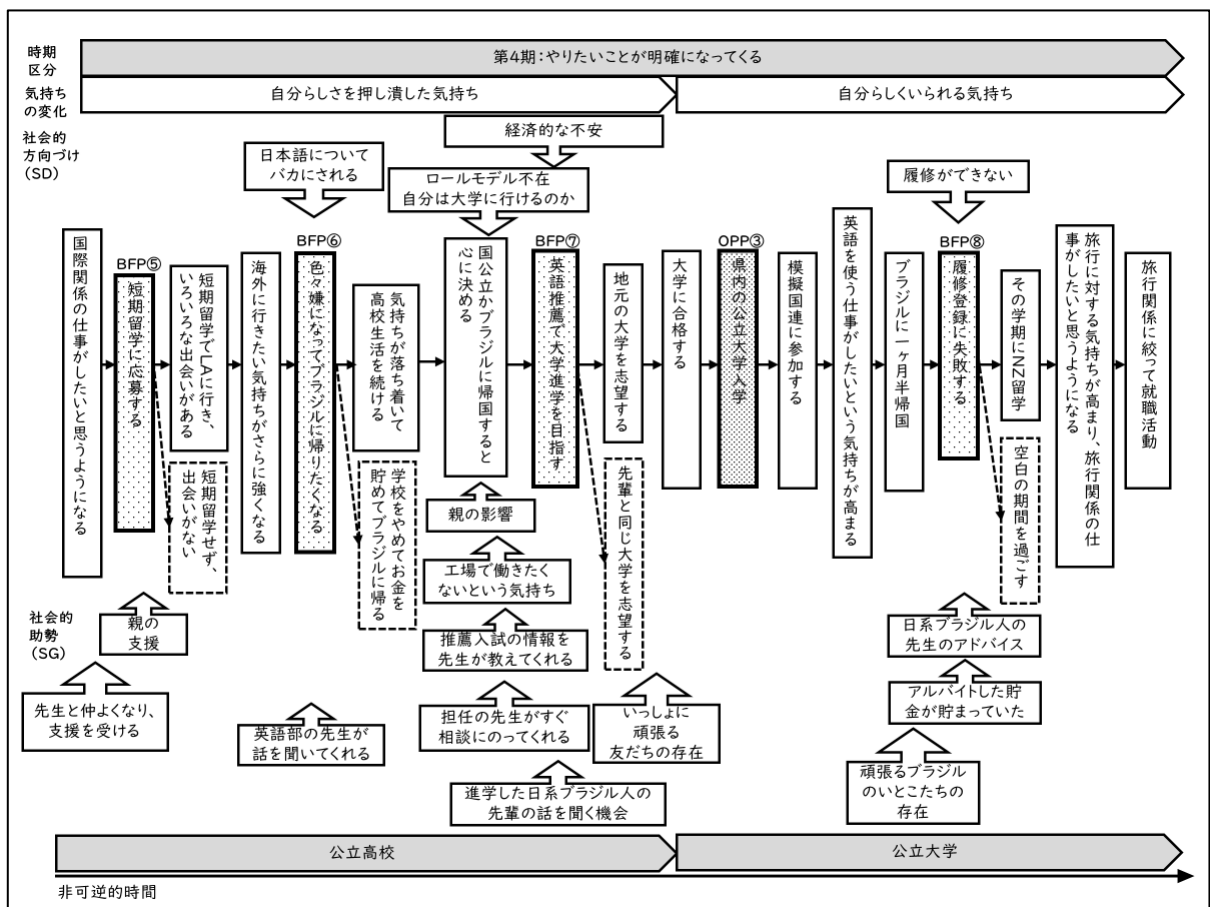
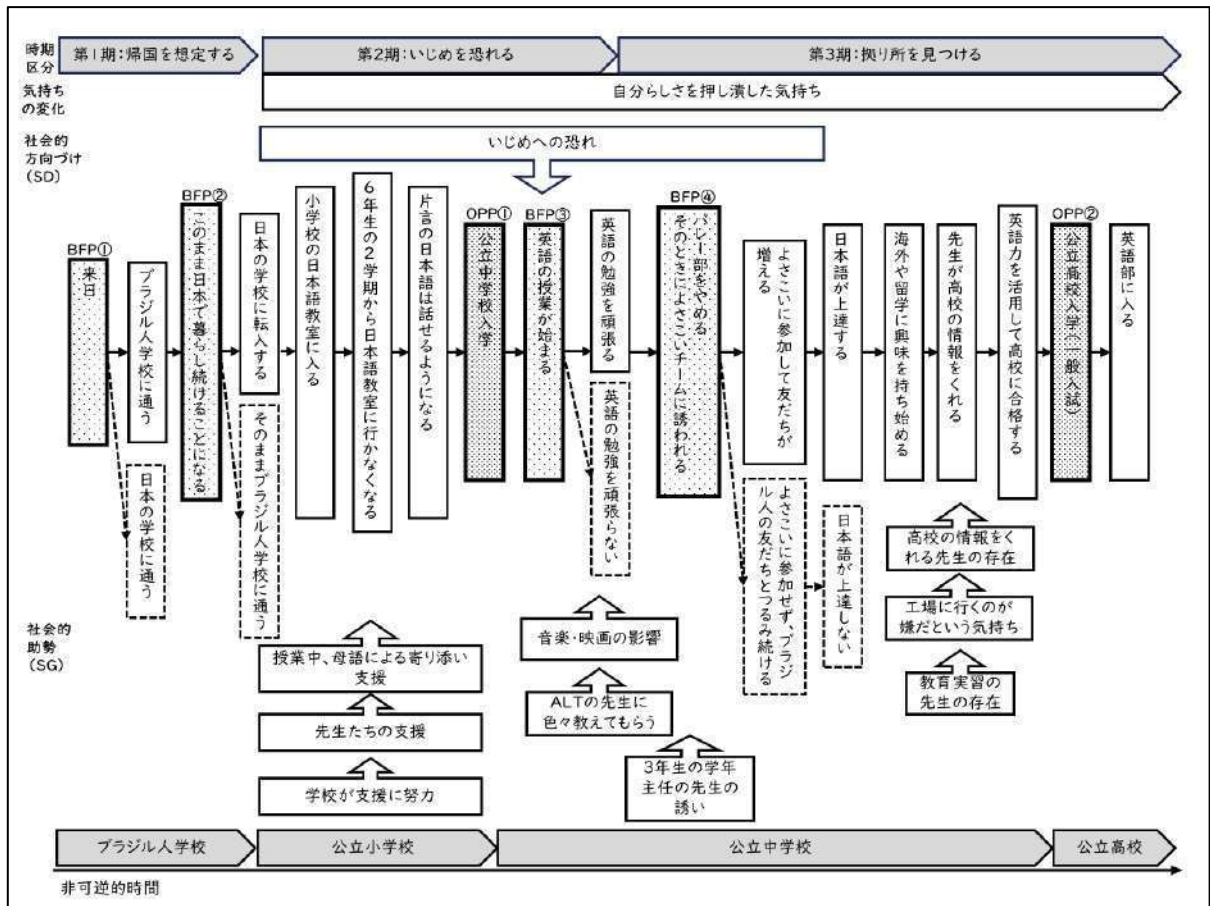


図1・2 Aが自ら仕事や人生を切り拓いていけるようになる過程のTEM図(その1・2)

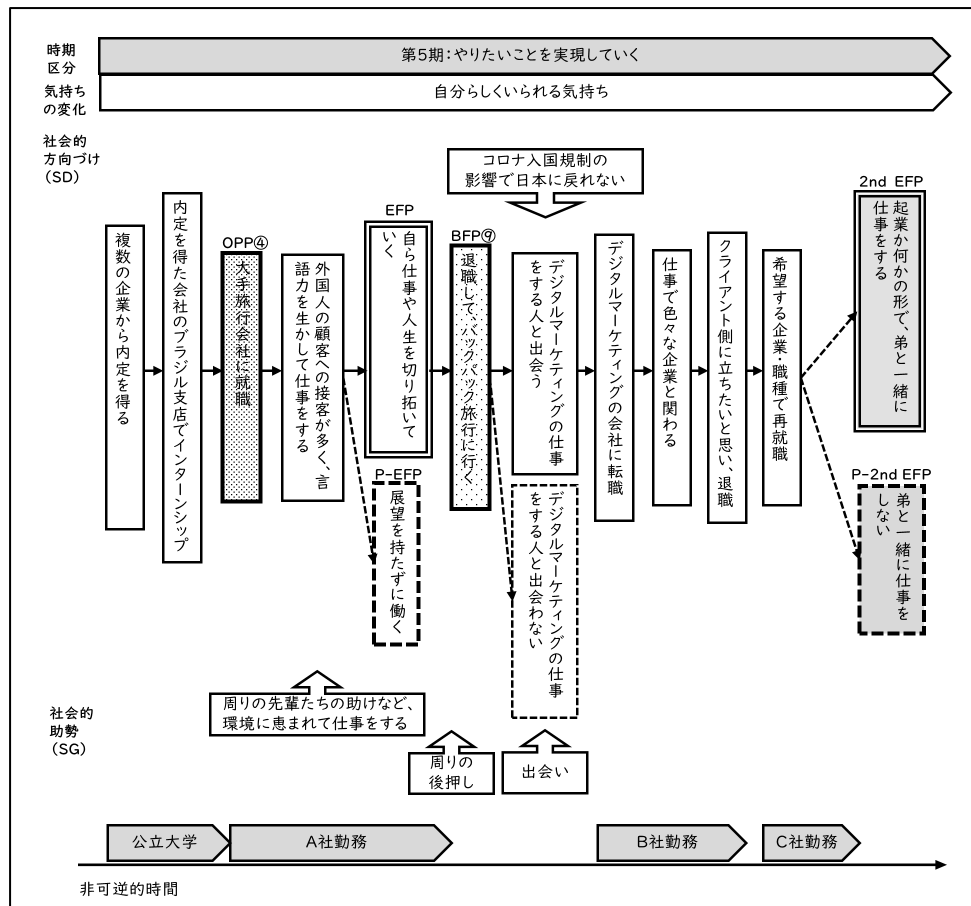


図3 Aが自ら仕事や人生を切り拓いていけるようになる過程のTEM図(その3)

ほかの人と違う行動をすることでいじめを受けることを恐れて日本語教室への参加をやめたということは、いじめへの恐れが学校生活に大きな影響を及ぼしていたことを示している。また、周りと同じ行動をとろうとして「自分らしさをちょっと押しつぶした気持ちはあったんですね」と語り、日本の小学校に行くようになってからの状況がA自身のあり方にも大きな影響を及ぼしていたことがわかる。しかし、小学校の対応については、日本語教室の教員が教室に入って一緒に勉強をサポートしてくれたり、「先生たちも外国人の生徒たちに対してすごい前向きに手伝ってくれ」たりしたということで、「頑張ってた学校だった」と評価している。

小学校に1年間ほど通うと「ちょっとは周りの日本人の子たちと話せる」ようになり、公立中学校に進学している。しかし、中学校での勉強については、「日本語、国語が一番苦手でしたね。赤点がたくさんありました」、「そのとき、日本史も全然付いていけなかった時期ですね。多分、中1で日本史の勉強してて、そのときまだ漢字、そんなに得意ではなかったもので、正直、日本史、全然分かんないです」と語っている。国語や日本史で特に苦労していたようである。また、中学校入学後バレー部に入部するが、「先輩のいじめがすごかったので、日本人、外国人とか関係なく」という理由で1年生の間にやめている。

#### 4.3 第3期：拠り所を見つける

国語や日本史には苦労したようであったが、中学校入学と同時に英語の授業が始まった。「ちょうど英語の授業が始まったので、やっぱり字、アルファベットだったので、そっちを一番頑張るようになりますので」、「英語を始めたときに一番テストでも点数取れてたので、頑張るやる気になったかなと思います」と英語

の勉強が自信となり、拠り所となっていたことがわかる。「本当に中学から英語一番頑張ってたかなと思います」とも語り、その後もAの強みとなっていく。ALTの先生が色々教えてくれるなどの後押しもあったようである。

このころの大きな出来事として、バレー部を退部した際に3年生の学年主任の先生によさこいのチームに誘われている。「そこに入って週末ボランティアしたり、老人ホームで踊ったりとか、本当にいろいろイベントに参加したりして。そこでやっぱり日本人だったり、日本のコミュニティーに入ったかなと思います。それで多分日本語ももっと話せるようになったし。」と語っている。「それがなければ多分本当にずっとブラジル人の子どもたちとつるんで、日本語もそんなに上達しないであってということがあったかもしれないですね」とも述べている。よさこいへの参加によって、日本での居場所を見つけ、拠り所となり、日本語力の向上にもつながっていったようである。

そして、中学卒業後の進路を考える時期にさしかかる。そのとき、「それ(=工場)が取りあえず嫌な、強かったですね。やっぱり高校まではちゃんと行きたい(原文ママ)」、「工場行くのがすごい嫌だったので、取りあえず勉強頑張ろうって」と思ったと語っている。自分の将来について考えなければいけない段階にさしかかり、「工場で働きたくないっていうのが、本当に親とか見てて、親からも言われて思い始めたので、高校受験を受けるときとか」と、工場で働きたくないという気持ちが高校進学への動機づけとなっていたことがわかる。さらに、中学2年生のときに来た教育実習生とその後連絡を取り合い、高校受験について相談にのってもらうことができた。また、「英語も好きだったし、海外に行ってみたい、留学とかにすごい興味も持ち始めてた」Aのために、先生が英語に力を入れて勉強できる進学先の情報をくれるということもあった。さまざまな後押しがあり、英語力を活用して公立高校に一般入試で進学している。入学後は英語部に入部し、また、「高校は全然日本語話せてたかなと思います」と言えるまでになった。国語の授業についても「結構国語もちゃんと付いていけるようになって。それでも漢字は苦手だったんですけど」と語っている。

#### 4. 4 第4期：やりたいことが明確になってくる

高校入学後、国語の授業にも何とかついていけるようになり、英語の授業も多く、担当の先生とも仲よくなって支援を受け、比較的順調であったようである。「多分国際学科だったの、英語学科かなんかだったので、英語の授業多めに選べたりとかできたので、そこの担当の先生もすごい仲よくなって、いろいろ支援というか、応援とかしてくれた」と語っている。そうした中で、「英語やっぱり好きで、ALTの先生もすごいいい人でいろいろ話して、海外に行きたいっていう気持ちももっと強くなって、そういう国際関係とかやりたいなって思いました」と、やりたいことがだんだん明確になってきたようであった。

さらに、高校2年生のときに、学校が提供するロサンゼルスへの2週間の短期留学に参加する機会を得る。ただし、学校の支援は主に経費で、手続き面の支援は乏しく、「ビザの手配とか、学校の手配とか、航空券の手配も全部自分で」しなくてはならなかった。Aは親の支援を受けてそれをやり遂げ、留学を実現させる。その留学の経験は「大きかったですね。本当に。特にLAはすごい移民も多いし、国際的だったのでよかったですね」と語っている。「本当に田舎ですと暮らしてたので、ブラジル人以外の外国人も会ったことなかったし、すごいいろんな出会いもありましたし」、「そこで本当に国際も、海外に行きたいっていう気持ちすごく強くなりましたね。なので、それで多分次の進路とかにも決めるときに役立ったかなと思います」と、海外に行きたい気持ちがさらに強まり、進路の選択に大きな影響を与えたと述べている。

一方で、色々たまって嫌になってブラジルに帰りたいと強く思うこともあったようである。「周りからち

よっかいというか、バカにされるっていう。日本語でバカにされることが多くて。例えば発音が違ったりとかすると、見た目で日本人なので、見た目が西洋系の人より厳しい、周りの目が。なので、それが。周りはふざけて言ってるだけなんですけど、それが1年、2年、ずっとと言われると、特に友達とってた方たちから言われると、すごい嫌になってく。それで嫌になったっていう感じですね。あと国語とか漢字の授業とかうまくいなくて、そういうのもありますね。日本語できないっていうのが、自分の中でだんだん固まっていったっていうか、重なっちゃって。けど、1日だったんですね。その1日でプーンって嫌になったってなりましたね」と、1日とごく短い時間ではあるが、嫌な気持ちをとても強く感じたようであった。しかし、そのようなときに、英語の授業と英語サークルを担当する先生が大きな支えとなる。「すごいいろいろ話聞いてくれたりとかしてくれた」おかげで、気持ちが落ち着いたようであった。

そして大学進学について具体的に考えるようになる。このときも、「大学とか行かなかったら仕事するしかないから、工場みたいなイメージが強かったの」と、工場で働きたくないという気持ちが動機となっている。経済的な不安から、国公立大学に進学することができなければブラジルに帰国すると決意すると、「多分先生に相談して、うちの高校やっぴり進学校ではなかったの、推薦でみんな入るんですね。なので、こういう大学にこういう推薦があるっていうのが教えてもらって」と、先生の支援を受けて情報を得て、どこを志望するかを考えていく。ただ、大学進学を考えることに難しさも感じたようであった。「やっぴりブラジル人で大学行ってる人って周りに誰もいなかったの、自分も行けるかなみたいな気持ちもあった」ということであった。しかし、3年生になってから、2、3年上で奨学金を得て大学に進学した先輩が高校に来て話を聞かせてくれたことで「それでなんかやっぴりロールモデルいると自信が付くっていうか、頑張りたいっていうのがありますね」と進学に対する自信が芽生えたようであった。ただ、その先輩と同じ都内の大学に英語推薦で進学することを考えたものの、先輩のように全額の奨学金をもらえるかどうか自信が持てず、「全体で生活費とかいろいろ考えたときに、やっぴりちょっと難しいって思って、地元、地元っていうか、H市の大学にしました」ということであった。同じ大学を目指す中国ルーツの友だちがいて、一緒に大学見学に行き、頑張ることができたと語っている。Aは英語の小論文と英語面接が課される英語推薦の方式で、友だちは一般推薦で合格を果たした。

入学した後は、日本語力で苦勞することもなく順調だったようである。日本語でレポートを書くことも特に困難は感じなかったようで、「大学1年生のときに、レポートの作り方みたいな感じ。外国人とかじゃなくて、日本人も、高校、卒業して、書き方も全く分かんない子たちが多いので、そういうのがあった気がします。大学のほうで。サンプルじゃないですけど、こういう書き方してほしいとか」と語っている。細かいフィードバックをもらったわけではなかったのだからわからないと断りつつも、Aにとってはそれで十分だったようである。

そして、大学1年生のときと2年生のとき、国内で開催された模擬国連に参加する機会を得ている。いろいろな国の学生が集まる模擬国連に参加して「国際関係というか、英語が使う仕事をしたいとか、そういう気持ちは高まりました」ということであった。

また、ブラジルに10年ぶりに一か月半の一時帰国もしている。ブラジルでは、「ブラジルだと大学だけじゃなくて、大学院に行くとか博士、大学院が普通で、自分のいとこたちも頑張ってるの見て、頑張らなきゃっていう気持ちもありますし、それもありますね」と、いとこたちから刺激を受けた様子うかがえる。

しかし、大きな事件が起こる。2年生の秋に履修登録に失敗し、その学期は一切授業の履修ができないという事態に陥る。登録の失敗は登録期限を忘れるといった理由であった。その学期は一切単位が取得で



きないことになるため、動揺も大きかったようであった。しかし、そのときに日系ブラジル人の先生から「授業は大事だけど、もしプランBとして留学行くのはどうって言われて」、そういう方法もあるのかという思いに至ったようであった。履修を認めるかどうか、大学の審議に一月かかる間に留学先を決め、アルバイト代が貯まっていたことも助けとなり、ニュージーランドへの2か月半の留学を決める。「そのおかげですごい自分の視野も広まったし、初めて1人旅行もその間にしたので、すごい旅行に対する気持ちも高まって、卒業したら旅行関係の仕事したいっていう気持ちが高まったんですよね、そのとき」と語り、実際に旅行関係に絞って就職活動を行っている。履修登録の失敗は結果的には多くのものを得る機会となったようであった。

やりたいことがだんだんと明確になっていったこの時期であるが、この時期の中でも大学入学を境として、その前と後でAの気持ちのあり方は異なる。高校時代は、すし店のキッチンという、人とあまり話さずに済む仕事を選んでアルバイトを続けていた。「私、人と話すの恥ずかしかったので」と理由を語っている。しかし、「大学入って、居酒屋のホールで、人とたくさん話しできる所、選んで、それも結構、役に立ってっていうか、すごい自分出せるようになったかなと思います」ということである。日本の小学校に行くようになって以来感じていた「自分らしさをちょっと押しつぶした気持ち」がなくなり、「大学に入ってから、自分らしく生きれたかなっていう気持ちはありますね」と、大きな変化を見せている

#### 4. 5 第5期：やりたいことを実現していく

就職活動では旅行関係の企業に絞り、英語、ポルトガル語、スペイン語ができること、外国人の目線で見られることなどを武器にして、複数の大手企業から内定を得ている。そして、そのうちの一家に入社を決め、卒業前にその企業のブラジル支社でインターンシップをする機会を得ている。旅行関係の仕事に就くという希望を実現させるだけでなく、大人になってからブラジルに住むという希望も実現している。

入社後は、海外の顧客を担当し、語学力を生かして仕事をしている。また、「結構旅行したりとか、会社のベネフィット使って行ったりとかして」充実した時間を過ごし、仕事の経験を積む中で「仕事は何とかなる」という自信をつけていったようである。

そして、仕事は何とかなると自信をつけたことで、新たに別のやりたいことの実現のために会社を辞めることを決断する。「ちょうど25のときに、ずっとヨーロッパ行ったら長期で回りたいな、バックパックしてみたいなっていう気持ちがあって。周りの先輩たちが結構、会社に10年間いたりとか、8年間いたりとか、長めに勤めてる先輩たちが多かったんで、このままずっとこういう人生行くのか、今、一回会社辞めて自分のやりたいことやるのか。そのとき先輩たちに普通に話したら、すごい背中押してくれて、ちょうど2019年なので、コロナが始まるちょっと前。それで9月に会社辞めて、バックパックに行きましたね」。

ただ、その間にコロナによる世界的な移動の制限の影響を受け、日本に戻ることがしばらくできなくなる。しかしその間も新たな出会いとやりたいことを見つけている。「旅行してるときにデジタル・マーケティングやってる方と出会って、ちょっと興味持ち始めて」、結果として日本への入国の機会を待つ時間は、デジタル・マーケティングの勉強をする時間となった。そして、日本に戻った後、すぐにデジタル・マーケティングの会社に転職を果たしている。

転職先では、「スタートアップみたいな感じなので、ちょっと忙しかったんですけど、いろんな企業さんと関わることもできた」ということであった。そして、新たに「クライアントさん側に付きたい」という希望を持ち、転職先を退職している。その後、1回目のインタビューの後、希望するインハウス・マーケ

ティングの仕事ができる有名外資系メーカーでのマーケティング担当の職を得ている。

やりたいことを実現させていく中で、いつ自分で人生を切り拓いていく自信をつけたのか。3 社目への入社が決まった後の 2 回目のインタビューで A は、「(マーケティングについては) まだそんなにできるわけでもないほうだったので自信はなかったんですけど、仕事は何とかなるっていう自信はあります。言語があったりとか今までの経験だったりがあると、マーケティング以外にも何とか行けると思うんですけど」と語っている。また、「時代が変わっていく中で、安定した会社っていうよりも、自由にフリーランスだったり、自分の好きなことをやっていけるのが一番幸せなのかなと思って」とも語っている。自分で人生を切り拓いていける自信を感じさせる。何とかなる、何とか行けると思うようになったのはいつ頃からかという質問に対し、A は「(就職後すぐは) 思わなかったですかね。やっぱり経験も何もなし、そこは働いていくうちに付いたのかなかと思えます」、「最初の仕事、観光業のほう一回辞めてバックパッカーに出たときは、戻ったら仕事は何とかなるのかなという気持ちで行ったので、多分、そのときぐらいかなかと思えますね」と語っている。最初の会社で働くうちに語学力を生かしながら経験を積むことで、自らの道を切り拓いていく自信をつけていったことがわかる。

そして、遠い目標として、弟さんと「いつかは一緒に仕事できる環境をつくりたいなっていうのがあるので、今はいろんな経験をしながら働いて、あとはもう少し、将来的にはそういうのをやりたいなっていう気持ちはあるんですけど、まだ全然、何も計画とかは立ててないですね」と考えを語っている。

## 5. 考察

A が「自ら仕事や人生を切り拓いていけるようになる」ように至る過程で鍵となったのは、何であったのか整理してみたい。親の影響や支え、工場で働きたくないという気持ち、小学校・中学校・高校・大学における先生たちの支え、ロールモデルの存在、視野を広げ、新たな経験や仲間を得る機会、強味を持つことが大きな鍵となったと考えられる。一方で、阻害する要因として、いじめへの恐れと経済的な不安に注目したい。

### 5. 1 親の影響や支え

鍵となったことの 1 つ目は親の影響や支えである。高校進学に対する両親の影響は大きかったようである。「仕事も嫌でそうだったんですけど、やっぱり高校行くのが当たり前っていうのが自分の中で思ってたのかな。親も。私のお母さんは高卒なので、ちゃんと高校までは行ってほしいっていうのがあって、お父さんは大学とか行ってたので、高校は行ってほしいっていうのがやっぱりあったんですね」。

大学進学についても、大学を卒業している父の影響から「小さいときというか、中学、高校とかのときはずっと考えてました」ということである。周囲には、「日本は、工場でも仕事すればその分もらえる、普通に生活ができるから、別にそこ (=大学進学) までしなくてもいいんじゃないっていう親もいるし、高いっていうイメージしてる方も多い」ということであるが、A の親は進学を支援する姿勢が強かったようである。

A は子どもの進学に対する親の影響の大きさを指摘している。「(親の影響は) 大きいと思います。多分コミュニティの中でも、親の支援ありかなしで結構分かれると思います。やっぱり働き始めた子たちも、中学卒業してすぐ働いた友達も、別に働けばお金もらえるから勉強しなくてもいいんじゃないっていう考え方の親もたくさんいたので」ということである。

また、A の親は、高校在学中に留学の機会を得た際は、いっしょに上京してビザの取得に付き添うなど

必要な支えを行っている。高校時代に留学の機会を得た際の親の支援は大きかったと語っている。

## 5. 2 工場で働きたくないという気持ち

鍵となったことの2つ目として、工場で働きたくないという気持ちが挙げられる。高校進学を考える段階、大学進学を考える段階、それぞれの段階でAは工場で働きたくないと考え、進学を目指している。「仕事がきついし、親も12時間とか14時間働いてる姿見て、嫌だって思ってたんですよ」と理由を語っている。工場で働きたくないという強い気持ちが、進学への強い動機づけとなったようである。

「特にブラジル人のコミュニティーだと工場っていう選択肢のほうが強いので、工場、別に悪いわけじゃないんですけど、工場に行きたいから工場に行く、工場しかないから工場に行くっていう、選択肢を増やしたほうがいいかなって思います」と、選択肢の保障の必要性を指摘している。

## 5. 3 小学校・中学校・高校・大学における先生たちの支え

3つ目として、小学校・中学校・高校・大学それぞれで、先生たちの支えが挙げられる。適切な進学の情報先生が提供してくれたことは大きかったと語っている。「どうしても親も日本語がそんな上手じゃなかったの、先生から言われたことしか分からない。例えば中学に行くとしても、高校に行くとしても、先生が行けないって言われたら、行けないのかなって思ったりとかするので」ということである。

また、小学校では教室に入って横について通訳の支援をする、中学校では部活をやめるAをよさこいチームに誘う、Aに合った高校の情報をくれる、高校では悩んだ際に話を聞いてくれる、推薦入試の情報をくれる、大学では履修登録に失敗した際に留学という方法を示してくれるというように、大変なときや進路を選択する際、そのときどきにおいて、先生が重要な役割を果たしている。

先生の接し方も重要である。「周りの友達で、先生の言葉遣いだったり、外国人に対する言葉遣いだったり、あなたできないとかっていうマイナスの言葉言われると、やっぱり子どもなので(中略)それで中学校で学校に行かなくなったりとか、高校で行かなくなったりする友達もたくさんいた」ということであるが、Aはそのような経験はなく、先生の支援を受けることができたと言っている。このように先生による支えがよい影響を及ぼしたと考えられる。

## 5. 4 ロールモデルの存在

鍵となったことの4つ目として、ロールモデルの存在を挙げたい。中学校時代、その先の進路を考える際、「なかなか周りにロールモデルになる方がそのときまだいなかったの、友達もみんなも工場で働いたの、もうちょっと1歳、2歳とか、年上の子たちは」と、ロールモデルの存在がなかったことへの戸惑いを語っている。一方、高校時代は、ロールモデルとなる同じ日系ブラジル人で大学進学を果たした先輩の話聞く機会を得て、「なんかやっぱりロールモデルいると自信が付くというか、頑張りたいっていうのがありますね」と語っている。各段階において、身近なロールモデルから話を聞く機会が重要であることを示している。

## 5. 5 視野を広げ、新たな経験や仲間を得る機会

5つ目の鍵は、機会の重要性である。中学校のときのよさこいチームへの参加は、Aにとって大きな分岐点であったと言える。抛り所となり、日本語力の向上にもプラスの影響を与えている。また、高校時代のロサンゼルス留学の機会、大学でのニュージーランド留学も、視野を広げ、やりたいことが明確になるな

ど、その後の進路決定に大きな影響を及ぼしている。このような機会を得たことが、A の進路選択にプラスの影響を及ぼしたと考えられ、さまざまな機会を得ることの重要性を示している。

## 5. 6 強味を持つこと

6つ目の鍵は、強味である。A は、中学校に入ってから、英語の勉強を頑張り、いい点数をとって自信につなげている。英語が得意であることが進路の選択の際に影響し、高校進学の際に有利に働き、大学進学でも有効に作用している。就職活動の際は、英語力に加え、ポルトガル語だけでなくスペイン語もできることを武器に内定を勝ち取っている。A にとっては語学力が大きな強みとなっている。このように、語学力であれ、何であれ、何かしら強みを持つことで本人の自信につながり、道を切り拓く武器ともなりうると言える。そのような強みを、自分自身で見つけ出すことが重要であるが、学校の先生や地域教室の支援者など周囲の大人が見つけて伝えること、本人が見つけるのを支援するといったことも必要であろう。

## 5. 7 阻害する要因

一方で、A が進路を選択するうえで阻害要因となったことがある。一つは、いじめへの恐れである。小学校のときはいじめを恐れて学校ではポルトガル語を話さないようにする、日本語教室に行くことをやめる、肌の色や宗教が異なる外国ルーツの子どもがいじめに遭うのを目撃するといったことを経験している。中学校のときは部活をやめる原因となっている。いじめの問題は外国ルーツの子どもに限った問題ではないかもしれないが、学校の中で、異なる文化や言語の違いを尊重する考えを浸透させることが、外国ルーツの子どもへのいじめの抑止につながる可能性もある。

また、もう一つの阻害要因は、経済的な不安である。高校 1 年生の途中から大学の入学金にするためにアルバイトをしており、毎月 4 万円貯金をしていたということである。大学に進学するかどうかを考える際は、ブラジルに帰る友人もいる中、「やっぱり私立行くのがちょっと難しかったので、国公立受かったら国公立行く、受かんなかったらちょっと工場でもどこかにバイトして、ブラジルに帰るっていうのが決めて」と、経済的な理由で進路選択の幅が狭められていた。都内の私立大学への推薦入学を目指すことも一時考えたようであったが、奨学金を受けたとしても「親の仕送りが難しかったので、自分のバイト代でどのぐらい稼げるかなって思って」という理由であきらめている。1 章で海外からの留学生向けの奨学金制度が充実していることを指摘したが、国内にいる外国ルーツの学生向けの奨学金の拡充が強く望まれる。

## 6. まとめ

外国ルーツの子どもたちが自由に進路選択を行うことができ、自ら仕事や人生を切り拓いていけるようになることが望まれる。A が人生を切り拓いていく過程における要因を 5 章で指摘したが、その要因の中でも、学校や社会として取り組めることを積極的に進めていく必要がある。学校や地域の教室などが一人一人に寄り添った支援を行うこと、進路に関する情報を十分提供すること、一人一人の強みを見出して伸ばすこと、また、ロールモデルとの出会いの場やさまざまな経験の機会を提供していくことが必要であると言えよう。また、いじめを防ぐためにも、学校に限らず、社会として異なる文化、言語の違いを尊重する風土を作ることが必要であると言える。外国ルーツの若者のための奨学金制度を手厚くしていくことも重要である。

今後は他の若者の事例も集め、蓄積していくことが必要であろう。より多くの事例から、外国ルーツの若者が高校・大学への進学を経て、就職して自らの人生を切り拓いていけるようになる過程において影響

を及ぼす要因を探り、これから進路を考える外国ルーツの子どもたちや、高校教員・大学教員・地域支援者など子どもたちの周囲で支援する立場にある人々に示すことを目指したい。

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 24K05774 の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』25, 95-107.
- 小澤伊久美 (2024) 「複線径路等至性アプローチ (TEA) のカギの概念—日本語教育研究で TEA を活用するために—」『日本語教育』187号, 45-58.
- 厚生労働省「「外国人雇用状況」の届出状況まとめ【本文】(令和6年10月末時点)」  
<<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001389442.pdf>> (2025年2月1日)
- 国土交通省「国土に係る状況変化③について(増加する外国人との共生、ライフスタイルの多様化等)」  
<<https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001319649.pdf>> (2024年6月21日)
- 小島祥美 (2019) 「外国人児童生徒等の就学・進学機会の確保」『文部科学省外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議(第5回)配付資料』<[https://www.mext.go.jp/content/1422198\\_001\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1422198_001_1_1.pdf)> (2024年6月22日)
- サトウタツヤ・安田裕子(監)(2023)『カタログ TEA(複線径路等至性アプローチ)—図で響きあう』新曜社
- 出入国在留管理庁「令和6年6月末現在における在留外国人数について【令和6年6月末】公表資料」  
<<https://www.moj.go.jp/isa/content/001425981.pdf>> (2025年1月10日)
- 独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)「STUDY in JAPAN 政府公認の日本留学情報」  
<<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/>> (2025年2月26日)
- 日本学術会議(2020)「提言 外国人の子どもの教育を受ける権利と修学の保障——公立高校の「入口」から「出口」まで」令和2年(2020年)8月11日」日本学術会議地域研究委員会  
<<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-t289-4.pdf>> (2024年6月8日)
- 文部科学省(2021)「大学入学者選抜関連基礎資料集第5分冊(経済的な状況や居住地域、障害の有無等にかかわらず、安心して試験を受けられる配慮関係)」<[https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt\\_daigaku02-000016365\\_11\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210629-mxt_daigaku02-000016365_11_1.pdf)> (2024年6月22日)
- 文部科学省(2024a)「令和5年度外国人の子供の就学状況等調査結果」<[https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt\\_kyokoku-000007294\\_202.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000007294_202.pdf)> (2025年1月10日)
- 文部科学省(2024b)「令和5年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」  
<[https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt\\_kyokoku-000037366\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000037366_4.pdf)> (2025年1月10日)
- 山森理恵・田口香奈恵(2024)「外国ルーツの生徒を対象とした大学入試制度と受け入れの実態」『明治大学教養論集』通巻578号, 185-209.